

旧約聖書がわかる本

〈対話〉でひもとくその世界

並木浩一、奥泉光著

河出新書 1397円

評・森本 あんり (神学者
東京女子大学長)

芥川賞作家と旧約学者。わたしは四〇年以上もこの二人の対話を聞いてきた。卒論合宿で、私的勉強会で、公開イベントで。いずれも即興のジャムセッションだが、モーツァルトがすさび弾いた無数の美しい即興演奏のごとく、それらが採譜もされずに消え去ったのをとても残念に思っていた。

今回ついにそれが本になった。だから今日は、お行儀のよい書評なんかやってる場合じゃない。対象本との批判的距離とかは放っておいて、何が何でも本紙読者のみなさまにこの本を手にとってもらいたい。思想の力に圧倒される、という実感をしていただきたいのである。

二人によると、旧約聖書はそもそも対話の書である。神と人との間だけでなく、人間にもはじめから複数性が想定されており、さらには神の内部にも複数性がある。だから「人間なんていうものをつくっちゃっていいのか」という神

「神は世界の外」思想語る



◇なみき・こういち＝
1935年生まれ。国際基
基督教大名譽教授◇お
いずみ・ひかる＝56年
生まれ。作家。

の自己内対話が生ずるのである。

旧約思想の特色は、神が世界の外にいる、ということである。そんな不自然で納得しがたい思想が生まれたのは、国家の滅亡を経験したからだ。だが、世界を超越する神は、神殿や教会には住まない。民族に内在しないから、自分の民を滅ぼす自由も再興する力もある。そこに、預言者の王権イデオロギー批判が胚胎し、官僚や聖職者でない在野の知識人層が育つ。ヴェーバーの脱魔術化論、丸山眞男の近代精神論、森有正の経験。教室で「明治百年」の起源神話批判を聞いたのは、もう半世紀前だったのか。

締めくくりはもちろん「ヨブ記」である。神に平伏する「よい子」のヨブではない。神に抗弁してあくまでも自己の正当性を訴え、そのことで神との対等な主体性を認められるヨブである。神は正義を問われるべき存在だ。そして、神が正義かどうかは、人間にとって大問題なのだ。モーツァルトを妬む宮廷楽長サリエリにとっても、今これを読むあなたにとっても。